

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）

大学院学生研究

2 0 2 5 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			経済学研究科	経済学専攻
研究代表者 (2026 年 3 月現在 のものを記入)	在籍課程・学年		氏 名		
	☐ 博士前期課程 年 ☒ 博士後期課程 1 年		一 関 瑛 貴		
指導教員	所属部局・職名		氏 名		
	経済学部 特別専任教授		佐 藤 有 史		
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会		個人・共同の別	個人 ・ 共同 名	
研究課題	デジタル化された貨幣の貨幣本質論的検討				
研究組織 (共同研究者が いる場合のみ、 2026 年 3 月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏 名		
研究期間	2 0 2 5 年度				
研究経費 (1 円単位)	(支出金額) 199,809 円 / (採択金額) 200,000 円				

研究の概要 (200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)
当該研究の研究目的を含むこと。 本研究は近年急速に進行する「貨幣のデジタル化」現象を経済学史における貨幣本質論の視点から解明することを目的とする。IT やインターネットの発展に伴い、デジタル化された新たな形態の貨幣が次々と登場している。こうした動きは貨幣の形態が物体から完全なデジタルデータへと移行することを意味し貨幣の本質に関する再検討を迫っている。 しかし現状では「なぜ貨幣に価値があるのか」といった根本的な問いに対する理論的検討が不十分である。そこで本研究では経済学の古典および貨幣論に関する先行研究を参照し貨幣概念の整理と再定義を行い、それをもとに「貨幣のデジタル化」という現象の歴史的・技術的背景を分析し、その全体像を把握する。
キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)
[貨幣論] [デジタル貨幣] [信用論]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか (できなかったのか)。
 - ・何をもって研究成果 (経過) を達成できた (できなかった) と考えられるのか。
- 自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

当該研究における研究成果 (明らかにできたこと)**主要国 CBDC の将来像の導出**

本年度の研究において明らかにできたのは、主要国が検討する CBDC の導入目的と設計要素の共通性、およびその「貨幣」としての将来像である。中国、スウェーデン、イギリス、ユーロ圏、日本などの主要国における CBDC の事例を比較検討した結果、各国が検討する CBDC の多くが「間接発行型 (二層構造)」「利用上限あり」「無利子」といった設計要素を共通して持っていることを明らかにした。また、これらの CBDC は既存の金融政策手段や銀行を中心とした金融システムを堅持しつつ、民間デジタル決済の急速な普及に伴う相互運用性の欠如やシステムリスクへの対策として、それらを「中央銀行マネー」の枠組みに包摂することを主な目的としていると論じた。

さらに、貨幣本質論の観点から CBDC をどのように位置づけるべきかという新たな理論的論点を提示することにも成功した。具体的には、間接発行型 CBDC は民間銀行が関わるため信用貨幣論的な要素を持つが信用創造は発生しないことや、利用上限が設けられている事実は CBDC の利用を決済手段に限定し貨幣数量説と整合的であること、また無利子とすることは価値尺度機能の阻害を防ぐ意図があることなど、貨幣の根源的機能と関連づけた理論的考察を行った。

これらの研究成果は、無査読論文「主要国における CBDC の導入目的 — 主要国中央銀行の描く CBDC の将来像 —」として結実させ、『立教経済学論叢』第 92 号 (2026 年 3 月発行) への掲載準備が完了している。複雑な各国の CBDC プロジェクトを横断的に比較し、貨幣としての本質的特徴を抽出したことは、今後の理論構築の強固な土台となるものである。

内生的貨幣供給理論に基づく CBDC 研究と論点の提示

さらに本年度の研究においては、デジタル貨幣の一種である中央銀行デジタル通貨 (CBDC) に対して、ポスト・ケインジアン経済学における内生的貨幣供給理論 (ホリゾンタリズムやストラクチャリズムなど) の観点を導入し、その供給メカニズムに関する新たな理論的考察を開始した。ここでは、中央銀行の負債として発行される新たなデジタル貨幣である CBDC は、金融当局によって外生的に (政策的に) 供給量が操作されるものなのか、それとも需要に応じて内生的に供給されるものなのかという問題意識を提示している。

この研究については、2025 年 8 月に開催された経済学史学会 YSS2025 でのポスター発表「貨幣本質論的視点からみる貨幣のデジタル化—内生的貨幣理論との関連性の検討—」にて構想を発表し、得られたフィードバックを参考にしつつ、検討を加速しており、『立教経済学研究』への投稿に向けて論文の執筆を進めた。さらに 2026 年 3 月には、ポスト・ケインズ派経済学研究会での口頭発表「CBDC (中央銀行デジタル通貨) 供給の内生性の検討—ポスト・ケインジアン的アプローチ—」と” International Workshop on Classical Political Economy 2026 at Rikkyo University”にて’ Consideration of the Endogenous Character of CBDC Supply: A Post-Keynesian Approach.’ と題した英語での研究発表を実施した。これらの活発な対外的アウトプットを通じて、他研究者から多くのフィードバックを得られたことにより、来年度に予定している『立教経済学研究』への査読付き論文の投稿に向けた更なる研究の彫琢が進むこととなった。

研究成果の概要 (つづき)**当該研究において明らかにできなかったこと****貨幣のデジタル化全般に及ぶ貨幣本質論的考察**

当該研究の全体構想である「デジタル化された貨幣の貨幣本質論的検討」では、預金通貨のデジタル化、民間デジタル決済サービス、暗号通貨など多様なデジタル貨幣を対象としている。しかし本年度の取り組みは、これら「貨幣のデジタル化」のうち CBDC の検討に特化する形となり、他のデジタル貨幣（暗号通貨やステーブルコイン等）に対する網羅的な研究や、それらを含めた全般的な考察を完了するには至らなかった。

しかしながら、この未達成部分は研究の遅滞を意味するものではない。当初設定した 2025 年度の研究計画においても、今年度においては「貨幣のデジタル化」のうち CBDC を中心としたサーベイを行う予定であり、CBDC に研究リソースを集中すること自体は計画通りである。

すなわち、あまりに広範な「貨幣のデジタル化」現象を闇雲に追うのではなく、まずは「中央銀行マネーのデジタル化」(=CBDC) に焦点を絞って理論的土台を固めることが今年度の主な目的であった。したがって、他のデジタル貨幣の研究に着手できなかったことは事実であるが、それは博士論文完成に向けた中長期的なロードマップにおける「次年度以降の正当な持ち越し課題」であり、全体計画に照らしても経過に支障ないと評価できる。

内生的貨幣供給理論に基づく貨幣のデジタル化研究

今年度より内生的貨幣供給理論に基づく CBDC 研究を開始したが、今年度中の結論の導出には至らなかった。これは、今日に至るまでの内生的貨幣供給理論の系譜に関する議論のサーベイとこれらの議論と CBDC を結びつけた先行研究の精査に時間を要したことが大きな要因である。しかしながら、研究は概ね順調な経過を辿っている。具体的には来年 5 月には経済学史学会全国大会にて、口頭発表「CBDC (中央銀行デジタル通貨) 供給の内生性の検討—ポスト・ケインジアン的アプローチ」を予定しており、本年度の研究を通して得られたフィードバックを反映した形での発表を目指している。これらの研究成果を踏まえた上で、来年度に予定している査読付き論文の投稿をもって、結論を導出する予定である。

今後は、今年度深めた理論的基盤を応用し、その他のデジタル貨幣と内生的貨幣供給との関連へと研究範囲を拡張していく予定である。具体的には、主として国内経済における銀行の信用創造を基礎とする信用貨幣の内生性の説明に集中してきた内生的貨幣供給理論を拡張し、国際決済の多層構造における貨幣の創造・移転・ファイナリティの決まり方を歴史・制度・技術から横断的に捉えることを目的とする。このようにして、国際決済ネットワークにおいてデジタル貨幣が内生的にどのように供給・機能するのかという新たな次元へと研究を発展させる所存である。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)

④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

① 雑誌論文

- ◆ 一関瑛貴(2026)「主要国における CBDC の導入目的 ―主要国中央銀行の描く CBDC の将来像―」『立教経済学論叢』(92), 11-40, 立教大学大学院経済学研究会.

④ その他

- ◆ 研究発表(ポスター, 査読なし, 国内)一関瑛貴(2025)「貨幣本質論的視点からみる貨幣のデジタル化 ―内生的貨幣理論との関連性の検討―」経済学史学会 YSS2025, 東京.
- ◆ 研究発表(口頭, 査読なし, 国内)一関瑛貴(2026)「CBDC(中央銀行デジタル通貨)供給の内生性の検討―ポスト・ケインジアン的アプローチ―」ポスト・ケインズ派経済学研究会, 東京.
- ◆ 研究発表(口頭, 査読無し, 国内) Eiki ICHINOSEKI (2026) '*Consideration of the Endogenous Character of CBDC Supply: A Post-Keynesian Approach.* ', International Workshop on Classical Political Economy 2026 at Rikkyo University, 東京.